猫蓑通信

第112号
特大号
令和二年
（2020年）
7月10日発行
（年4回発行）

リモート連句の可能性

連句協会理事　山中たけを氏インタビュー

パソコン、スマホなどで何人かが互いの音声、映像を共有しながら会話できるリモート会議システムを、プライベートな「女子会」などにも使う動きが、コロナウィルス対策の外出自粛期間に盛んになった。これを連句の座に活用する試みも始まっている。日本連句協会で、ネットを利用した連句普及に取り組まれている山中たけを理事に、このような「リモート連句」の可能性についてお話をうかがった。

猫：まず、メールや「掲示板」を使った文音に較べての、『リモート連句』の利点を教えて下さい。

たけを：インターネットの世界では、ネット上で全てが完結するものを好む傾向にあるようです。インターネット掲示板での文音へ誘導できたことはあるのですが、顔と顔を突き合わせての連句会へ呼び出すのはなかなか難しい。自宅から出かけず連句を体験できる『リモート連句』はネットと相性がよく、効果を期待できます。

コロナ禍で連句実作会の中止が目立っていますが、これをきっかけに、ベテランのみなさまにも『リモート連句』をはじめてもらうことができたら、インターネット上で連句ブームを起こせるかもしれません。転んでもただでは起きずに、コロナ禍のピンチをチャンスに変えて、皆様と一緒に連句の普及を加速させられればと願っています。具体的な利点としては以下のようなことがあると思います。

❶インターネットとビデオ通話のできる端末があれば、どこでもいつもの連衆と連句ができます。❷何らかの理由で自宅から出られない方が実作に戻るきっかけになりえます。❸離れた地方や海外の人とも連句ができます。❹顔をつきあわせて連句を張行するので、文音に比べれば実際の座に近く、即興性もあり、座の反応も見られます。❺森羅万象に思いを馳せる連句は、まるで小さな旅のような体験になりうると感じています。コロナ禍のいま、STAY HOMEでも人が心を自由にするきっかけになるかもしれません。

猫：では、現時点での限界や、見えて来た課題などについて教えて下さい。

たけを：いまのところ見えてきたのは、以下のような事柄です。

❶一般参加にはインターネットとビデオ通話のできる端末が必要です。スマートフォンでも可能ですが、インターネット契約や端末の購入にはそれなりのコストと労力が必要です。❷捌ひとりでの進行は難しそうです。執筆のような書記担当が必要だと思いました。❸捌や書記担当にはパソコンやリモート通話アプリケーションの知識が必要です。❹本当に顔を突き合わせての実作に比べれば、情報量は少ないでしょう。❺捌の進行する会話以外に雑談するには少しコツが必要なようです。新たな捌のノウハウの構築が期待されます。

猫：新たなメディア（情報媒体）には新たなノウハウが育つ、ということですね。それ自体が楽しみな気がします。ありがとうございました。

●目次●

◎リモート連句の可能性　山中たけを氏インタビュー　1
◎第百四十五回例会
平成三十年亀戸天神社藤祭興行二十韻八巻
奉納直会興行二十韻　鈴木了斎　捌　2
意味を噛みしめれば　西田一枝　4
平成三十年藤祭奉納正式俳諧二十韻　5
◎令和二年えひめ俳口全国連句大会　受賞作品
愛媛県知事賞
歌仙「旧庁舎」・受賞の記　江津ひろみ　捌　6
松山市長賞
歌仙「身の内の」・受賞の記　高塚霞　捌　7
愛媛新聞社長賞
歌仙「秋暑し」　杉本聰　捌　8
あいテレビ賞
歌仙「節分や」　荒木鑑　捌　9
愛媛県連句連盟会長賞
歌仙「猫語鳥語」　石川葵　捌　9
俳口実行委員会会長賞
歌仙「覚え忘るる」　鈴木了斎　捌　10
◎温故知新　20：月と恋はなぜ必須なのか　10
◎第百四十九回例会
平成三十一年亀戸天神社藤祭興行二十韻九巻
お父ちゃんは何て言ってる？　若林文伸　捌　11
奉納直会興行二十韻　岩崎あき子　捌　12
平成三十一年藤祭奉納正式俳諧二十韻　15
◎令和二年岐阜県文芸祭　秀作賞受賞作品
短歌行「クリムトの女」　鈴木千恵子　捌　15
連句上の……　奥野美友紀　16
◎水壺連のことなど　御園魚彦　17
◎事務局だより　18
20

平成三十年

亀戸天神社藤祭俳諧興行　1～6

釁替の座

二十韻「若き藤」　倉本路子　捌

まだいまだ地は遠けれど若き藤　路子
　思ひそれぞれ春惜しむ人　忠史
新刊書楽しむ縁のうららかに　雅子
　そろりそろりと寄つてくる猫　郁子
ウ 海亀の月の浜へと上り来て　有子
　暑中休暇は今日でお終ひ　史
ウィンクのその一瞬をシャッターに　有
　勝負あつたり宮様の恋　史
投打走人気抜群大谷君　仝
　不眠不休の介護ロボット　雅
ナオ あへぎつつ冬山を行くラッセル車　有
　神への祈り三の酉まで　郁
少しずつ育毛剤の効果出る　有
　愛に年齢制限はなし　路
繊月下世間に追はれ渡し舟　史
　肝を据ゑんと呷るどぶろく　雅
ナウ 槍先に千成瓢箪結びつけ　史
　六根清浄唱へ行者等　郁
復興の槌音高き花の里　雅
　家苞にする名代草餅　郁

連衆　根津忠史　武井雅子　東　郁子　佐々木有子

初天神の座

二十韻「藤ふさの影」　髙橋豊美　捌

やは東風に藤ふさの影ゆれやまず　豊美
　亀首延ばす麗らかな日々　俊子
春炬燵プラレール子と走らせて　未悠
　猫の後追ひカクシャクと爺　秀樹
ウ 豊年を祝ふ集ひを照らす月　俊
　夜学の生徒我も還暦　豊
いとほしさ昔の秋とかはらずに　樹
　水兵の恋港々に　悠
熟女ママをんな神輿に入れあげて　豊
　初蜩の声に驚く　俊
ナオ 清らかな四万十川の沈下橋　悠
　植物図鑑に名を残す人　樹
算額を解いてみせると競ひ合い　俊
　太極拳する冬の曙　豊
魚河岸に息白く吐き月冴ゆる　樹
　頼りにしてる自動運転　悠
ナウ 解散か幹事長いふ知らないと　豊
　聞こえぬふりでひとり酒酌む　俊
摩崖佛ほほ笑みたまふ花の雲　悠
　朝寝のくせが抜けぬこの頃　樹

連衆　三木俊子　棚町未悠　青木秀樹

梅祭の座

二十韻「藤房や」　長坂節子　捌

藤房や風の遊びのはじまりぬ　節子
　亀の甲羅も乾く永き日　あき子
利茶して若やぐ声のお座敷に　健
　ベストセラーの詩集手に入れ　節
ウ 玉の汗昼月の中鍬を持つ　酔山
　彼の日焼けに潮の匂ひが　あ
帰さない帰りたくない膝枕　健
　やつとかめだなもひしと抱擁　一枝
バイバイと赤いドレスは地下街へ　節
　シルバーパスでどこへでも行く　あ
ナオ このところ俺にとりつく放屁虫（へひり）　山
　交喙の嘴か事務次官とは　枝
お忍びの秘密を覗く十三夜　健
　ふれる肌（はだへ）の滑らかなこと　節
底冷の街駆けぬけるメルセデス　あ
　勤行の後僧は熱燗　山
ナウ 勲章をあきらめきれぬ人のゐて　枝
　繰り返し見る夢の宴よ　健
満開の花の翳りに身をほぐす　あ
　遠浅の海ひそむ馬刀貝　枝

連衆　岩崎あき子　由井　健　吉田酔山　西田一枝

学業講の座

二十韻「撫牛の」　松島アンズ　捌

撫牛の紙垂あらたしや藤祭　アンズ
階に立つ淡き陽炎　暁巳
磯菜摘海の匂ひをまとひ来て　敏枝
ペットボトルは大きめがいい　泉子
ウ 縁台にふたり涼めば月上る　幸子
口移しする馴鮓の味　巳
ひそやかに案を練つてる遺言状　泉
墨磨る音のきしむ文机　巳
次の旅インド・エジプト・アルゼンチン　幸
寝酒持ち込み女子会をする　枝
ナオ 雪合羽槍のごと行く修行僧　仝
電動カーのしのぎ削りつ　幸
遠くから見てゐる人が気になつて　巳
噂にたたぬ恋の口惜しさ　枝
月仰ぎアラン・ドロンが今も好き　泉
稲の穂波にまろぶ柴犬　枝
ナウ 秋小寒運動靴の紐固く　幸
ノンポリだつた学生の頃　ア
花簪古都の塔頭黒々と　巳
酒蒸にする浅蜊蛤　泉

連衆　島村暁巳　箭内敏枝　青木泉子
飯島幸子

夏越祓の座

二十韻「笙の音」　武井敦子　捌

藤まつり笙の音ゆるく流れゆき　敦子
春を惜みて撫づる神牛　遊眠
赤青黄きしやごで子らの遊ぶらん　美奈子
リボンでわかるクラス学年　明子
ウ パソコンに自慢のレシピ打ち込んで　佳之子
彼の好みで選ぶ香水　吉文
蛍に想ひ託して月の舟　奈
オープンカフェでカンツォーネ聴く　眠
四六時中監視カメラに視られてる　吉
服を着た犬信号を待ち　之
ナオ 投げ上げてまた投げ上げて干す大根　明
顔見世興行ずずぃ～と決め　奈
梨園には梨園の掟隠れ妻　眠
遣り繰りうまし子にも恵まれ　吉
深閑のサファリパークに月昇る　之
魔女はティーチャーハロウィンの夜　明
ナウ ふるさとは夢に愛ほしぬくめ酒　奈
ひと筆で画く便りあつさり　眠
爛漫の花祝ひをりメダリスト　吉
卓球のラリー暖かな午后　明

連衆　内田遊眠　鈴木美奈子　野口明子
染谷佳之子　永田吉文

筆塚祭の座

二十韻「墨東の風」　奥野美友紀　捌

墨東の風のさやぐや夏隣　美友紀
藤の香残る池の漣　了斎
昼ごはんレタスサラダに塩ふつて　正夫
手乗り文鳥肩を離れず　ひろみ
ウ 語りつつ歩めば遠き道もよし　富子
売れないけれど君の絵が好き　み
恋人たち飛んでるやうな雪月夜　斎
熊出現のニュース度々　富
並びたる笑顔ばかりの園遊会　夫
歯医者の予約すぐは取れない　紀
ナオ 帰省子となつて故郷のめづらしく　斎
軒に下がつた鯵の干しもの　富
見られてはならぬ二人の隠れ部屋　み
大僧正が青僧に惚れ　斎
雑巾でバケツの月を掬ふごと　み
到来物の今年酒酌む　夫
ナウ 芸術祭五言絶句の吟詠も　仝
所狭しと並ぶ自転車　紀
花の湧くとき人も沸く過疎の村　富
舞ふか迷ふか蝶を追ひゆく　執筆

連衆　鈴木了斎　國司正夫　江津ひろみ
名古屋富子

平成三十年四月二十六日　首尾
於　亀戸天神社

平成三十年 亀戸天神社藤祭俳諧興行 7～8

献灯明の座

二十韻「奉納の墨書」 斎藤久美 捌

奉納の墨書鮮やか藤祭　久美
　昨日雨鷽今日は照鷽　文伸
連凧を揚げる仕草の大人びて　鄭和
　sine cosine 僕に任せろ　千惠子
ウ　三段跳記録更新期待され　霞
　砂漠の月に薫るジャスミン　和
アフガンの少女サレヒが嫁ぐ国　伸
　いろはにほへと恋歌を知る　霞
太夫猿人の言葉を理解して　千
　寒九の水の喉越ぞよき　霞
ナオ　したたかに酔うて巡れる小姓町　伸
　気に入つてゐた帽子忘れる　千
傘寿とは云へどときめき繰り返し　霞
　インクの切れたペンを振る女　美
月の下口説き文句は耳許へ　霞
　蛇穴に入る里のあちこち　伸
ナウ　和尚さんスクーター駆り爽やかに　和
　まつすぐ目指す屋台ラーメン　千
花前線上り詰めたる北の街　和
　海広がりて遊ぶ陽炎　執筆

連衆　若林文伸　高山鄭和　鈴木千惠子
　高塚霞

平成三十年四月二十六日 首尾 於 亀戸天神社

菊祭の座

二十韻「笙の調べ」 菅原通斉 捌

藤の香や笙の調べの神楽殿　通斉
　亀の泳げる春尽の池　淳子
双眼鏡雲雀の数を確かめて　転石
　足元はづむ流行の靴　純子
ウ　夏休み月の観察親子会　畢
　青葉時雨の影に寄りそふ　淳
クルーズ船共に乗れるか誘はれて　純
　ゆつくり上がるシャンパンの泡　斉
泣き笑ひ仮想通貨で消えた夢　畢
　北の元帥また嘘をつく　淳
ナオ　雪しまく峠を越える姉妹　石
　夜咄の茶事灯す蝋燭　畢
スマホ手に席はづすのはいつも彼　純
　不在証明妻は恐ろし　淳
捜し物まだ見つからず月昇る　仝
　難民キャンプに仰ぐ流星　石
ナウ　村芝居出番終れば寝る子役　淳
　水草洗ふ清き小流れ　石
山辺より風舞ひおりて花大樹　純
　将棋の駒が立つて麗か　石

連衆　上月淳子　林転石　近藤純子
　竹中畢

亀戸天神社奉納直会興行

平成三十年五月二十四日　首尾
於　錦糸町ガスト

二十韻「さかしまの塔」 鈴木了斎 捌

池の面をさかしまの塔夏燕　了斎
　また立ち止まる青梅の下　雅子
バス停へ保育園児ら跳び降りて　転石
　晩のメニューがまたカレーです　千惠子
ウ　望遠鏡焦点合はす満月に　有子
　流浪の民は亡び秋澄む　斎
くれなゐの色を尽くせる唐辛子　雅
　俺に近づくだけで燃え出す　千
ドラムロール身に覚えある胸騒ぎ　仝
　酸つぱい物がやたら食べたい　有
ナオ　観世音奇しき珠を捧げ持つ　石
　もと板金屋いま彫金師　有
月冴ゆる民泊は皆エトランゼ　雅
　川端康成読み終へて雪　有
深々と眠れる美女をそつと撫で　千
　うらがへしまたうらがへす背な　斎
ナウ　有罪を防犯カメラ証明す　有
　朧々にガス灯を点け　斎
袖通す薫りは何ぞ花衣　石
　梨地の椀に浮かぶ甘海苔　執筆

連衆　武井雅子　林転石　鈴木千惠子
　佐々木有子

意味を噛みしめれば

……正式俳諧執筆のお役を終えて

西田一枝

「次の執筆をやってくれませんか」。それは有子様からのお電話からはじまった。気がついたら「はい」と答えていた。事の重大さをきちんと捉えていなかったようだ。私にもそういうお役が回って来る時が来たのかな、とぼんやり考えていたような気がする。私なぞより相応しい先輩方が、とは思ったが、膝などに困難を抱えていらっしゃるのは知っていたから。

秋の明雅忌と春の藤祭。大体は出席して拝見してきているのだが、見るのと実際やるのとでは大違い。まさか自分にこのお役が回って来るとは思わなかったから、漫然と見ていた。DVDや「次第」を用意していただいたのでじっくりと勉強したが、中々頭に入らず情けなかった。先輩方は淡々と流れるように運んでおられるように見えたが、私には難しかった。

秋の正式俳諧で、明雅先生の御写真の前で有子様が執筆を務められた際に、実作会での捌を仰せつかり、発句で「白髯の御前歌膝秋麗」と詠ませて頂いた。その発句に詠んだ歌膝の袴をお借り出来ることになり、有難かった。

秋の明雅忌は疵の多い後悔の残るものになってしまったが、藤祭の時は、何とか「次第」を呑み込んだ上で臨むことができ、少しはましだったのではないかという気がする。「意味が分かると呑み込みやすいだろ」と青木会長がおっしゃった通りだ。

貴重な文台をご用意くださった雅子様をはじめ、ここに書ききれないほど大勢の方にお世話になった。ちなみに、練習用に夫に作って貰った実物大の「文台もどき」が手元にあるので、練習に必要な向きはどうぞお使い下さい。

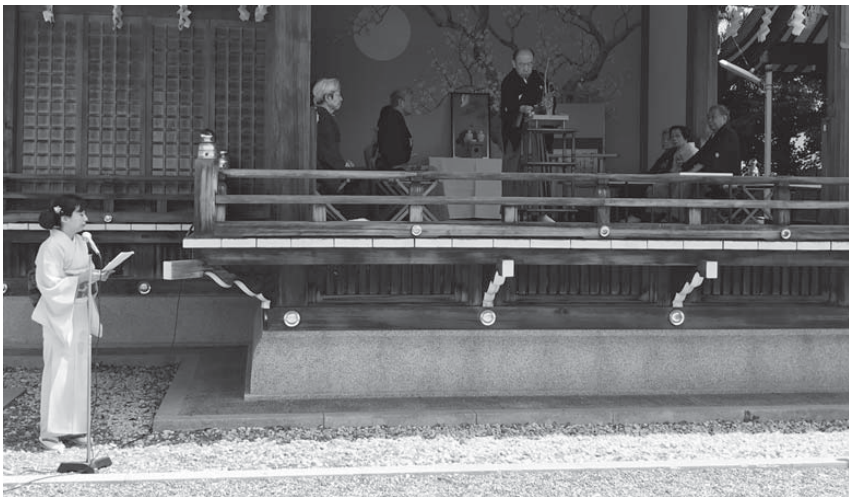
明雅忌は「折々に伊吹を見ては冬ごもり」と芭蕉発句の脇起り。挙句は「ひとあたたかに水の惑星」。藤祭は「人と蝶と昇るや藤の階を」と了斎様発句、挙句は「田打ちの里の曇程よし」。藤祭には朝日新聞の取材が入り、六月六日の夕

水引をしごいて確かめる。執筆文台捌の見せ場の一つ

刊に掲載された。

このところコロナウイルスの災厄が世界を覆っていて何とも憂鬱である。現代のバベルの塔かとも思う。一座して連句を巻くことの楽しさを少しでも早く取り戻したいものと思う。

とまれ、執筆をさせていただいたことは有り難く、大変貴重な体験だった。藤祭の亀戸天神社神楽殿に吹き渡った風は爽やかだった。



神楽殿前では、正式俳諧の進行に応じて解説係が観衆に説明する

第三十二回 亀戸天神社藤祭奉納正式俳諧

俳諧之連歌　二十韻

人と蝶と昇るや藤の階を　了斎
春の帽子の淡き色合　千惠子
磯小屋に海女の衣をくつろげて　孝子
二日遅れの郵便が来る　暁巳
月の夜の猿の腰掛少し欠け（ウ）　あや
しめし合はせて虫の草叢　冬乃
駈落ちの姿くらます万鬼祭　有子
振子変はらず時きざみをり　路子
バッカスとワイン談議に盛上がる　健
くたびれ背広初の講義を　俊子
前は川裏は松山夏座敷（ナオ）　忠史
肝試しには月侍みつつ　雅子
古稀なれどわが父未だダンプ乗り　文伸
あちらこちらで泣かす若い娘　遊眠
もつれあふあたかも猫と毛糸玉　アンズ
氷柱育てば尖る危ふさ　久美
鉦叩け髑髏肋骨皆踊れ（ナウ）　転石
何はともあれ生かさるる日々　霞
思ひ立つ列島縦断花の旅　秀樹
田打の里の曇程よし　執筆

平成三十年四月二十六日　首尾
亀戸天神社神楽殿に於て興行

亀戸天神社藤祭正式俳諧配役

宗匠　生生庵秀樹
脇宗匠　上月　淳子
執筆　西田　一枝
知司　若林　文伸
副知司　内田　遊眠
座見　根津　忠史
座配　三木　俊子
花司　林　転石
配硯　斎藤　久美
老長　倉本　路子
解説　鈴木千惠子

興行を終えて、配役一同、ご神職を交え記念撮影

第二十四回（令和二年）
えひめ俳口全国連句大会入賞歌仙六巻

愛媛県知事賞

歌仙「旧庁舎」　江津ひろみ　捌

旧庁舎ネヂ巻く夏の時計塔　ひろみ
　重く滴る紫陽花の毬　孝子
刺繍糸色さまざまに調へて　敦子
　イヤフォンで聴くピアノ組曲　文恵
ハイウェイカーブの先に大き月　孝
　丘の牧場に馬肥ゆる頃　み
ウ
味噌の香に名残の茄子の焼き上がり　恵
　外国切手マスターの趣味　敦
タイピンにきらりと光るメレダイヤ　み
　女涙を見せぬ気位　孝
丸秘事項寝物語に流出し　敦
　誰の仕業かタンカーの火事　恵
月の下荒れた手足で子を抱き　み
　W杯に何時か行く夢　孝
怪我をした鷺の佇む露天風呂　恵
　残業減って明け渡す家　敦
托鉢の片手拝みに花を受け　孝
　後に先にと舞へる白蝶　み
ナオ
青き踏む世界遺産の紀伊の旅　敦
　未だに褪せず御連歌の文字　恵
嘆け怒れ嗚呼閣僚の虚言癖　孝
　デフォルメをして似顔絵を描く　み
エイサーの太鼓響けばお祭りだ　恵
　浴衣きりりと半幅の帯　敦
初めての男の匂ひむせかへる　み
　明日入隊の命抱くなり　孝
生きてゐて人に尽くすも有難く　敦
　健康メニュー社員食堂　孝
月現る能管の音に雲切れて　恵
　刈入れ済ませ寝込みたる祖父　敦
ナウ
籠背負つて誰も来ぬ間の栗拾ひ　恵
　虫食ひパズル止められません　敦
大吟醸猪口の蛇の目の鮮やかに　み
　故郷の名を揚げる優勝　孝
花満開七言絶句朗朗と　み
　野点の席に抜ける軟東風　恵

連衆　坂本孝子　武井敦子　木村文恵
令和元年六月十五日　首尾
於　赤城生涯学習館

ビールが好き饅頭も好き
江津ひろみ

この度は愛媛県知事賞という望外の賞を頂き、感激と同時に身の引き締まる思いをしています。捌と言いつつも、偏に連衆の皆様のお陰で深く感謝するばかりです。

巻名の旧庁舎とは、私の故郷の旧山形県庁舎です。小さな街の小さな建物ですが、煉瓦造りの美しい建物です。

時計塔は、今も週一回捻子を巻き、時刻合わせをしているとのことです。三代にわたり時計塔の管理をしてきた時計屋さんが、子どもの頃のご近所さんだったことを初めて知り、時間が戻ったかのような不思議な感動を覚えました。

東京で暮らす年月は、山形で暮らした年月の何倍にもなります。それでも、故郷の古い友人と話す時には「東京の人はね～」と言いながら素早く山形県人に変身し、東京の友人と話す時には「山形ではね～」と言いながらちゃっかり都民になりすます。時々、私は何者？何処の人？自分で自分を何処に位置づけたいのかな？と、不安になったりします。

連句を始めた時に戸惑ったのが、付けと転じでした。鮮やかに打越を離れてしっかり前句に付ける、と言われてもね……という感じ。今もその難しさは変わりません。が、それでも、連句をやるということは、時空を超えて世界を行き来すること、その中に身を置くこと、そんな感覚になってきました。やかましい（失礼かな？）式目も、自由に行き来するためのきわめて合理的な約束。そんなふうに思えてきたのです。勿論、そう思うことが実力アップに繋がらないところが悲しいのですが。

山形の人？東京の人？こんなことは宇宙空間まで題材にする連句においては、ごくごく小さなこと。あっちの人もこっちの人も大好き。これも連句ではごくごく普通。とすれば、時に自分をデラシネと感じることもあるけれど、まあ、悪いことばかりではないか。そんな気もします。そう言えば、私はビールが大好きで饅頭も大好き。でも考え込んだりしないもの。

第二十四回（令和二年）
えひめ俳口全国連句大会入賞歌仙 二～四

松山市長賞

歌仙「身の内の」　高塚 霞　捌

身の内の鬼飼ひならす春の闇　霞
　黒髪解けば柳絮一片　徹心
やあやあと古書肆の主うららかに　孝子
　犬に引かれて散歩する人　あき子
弓張の月に静まる大都会　恵子
　コンビナートにうそ寒の風　孝
水割りのコップに添へるピーナッツ　仝
　子育て中の苦労話を　純子
同宿のあの夜が事の始まりで　心
　浮気曝露の週刊誌売れ　あ
シャンゼリゼ今は暴徒の巷とか　孝
　ノエルの鐘に跪く月　仝
兎らし子の見つけたる足跡は　純
　肉食恐竜日本にもゐた　心
移住してオーガニックのレストラン　あ
　ドローンで撮る島の風景　恵
花吹雪眼下の淵に舞ひ込まん　純
　陽炎踏んで郵便夫来る　孝
ポケットの板チョコ溶ける暖かさ　あ
　救急病棟急にせはしく　心
手裏剣を打つて忍びは梁の上　仝
　覗かれてゐた姫宮の恋　孝
ひと夏のアヴァンチュールの狂ほしく　霞
　蚊取線香消えぬ想ひ出　恵
競輪は既に五輪の種目にて　心
　赤ペン耳に挟む小父さん　孝
仙台平男ながらの着道楽　心
　保守の地盤は時に揺れつつ　孝
悠然と鯉の呑み込む水の月　あ
　草庵巡り拾ふ団栗　純
秋渇ディスカウントが心惹く　孝
　人手不足で降ろすシャッター　心
誰が描ける詩情漂ふ抽象画　孝
　団十郎が睨み見得切る　恵
肩袂裾も万朶の花衣　心
　蝶の誘ふ白昼の夢　あ

連衆　佐藤徹心　坂本孝子　岩崎あき子
　渡辺恵子　近藤純子
平成三十一年三月十八日　首尾
於　庚申文化会館

甦りを信じて
高塚 霞

猫蓑会に入会して、十三年になります。

当初、宗匠方はじめ、手練れ揃いの深川連句会では気後れの塊でしたが、人との交わりが好きな性分ですので、先輩方が開かれている数々の連句会にも出かけるようになりました。

今年の第二十四回えひめ俳口全国連句大会で松山市長賞に与った作品は、現在は鈴木了斎さまの運営される四宮会での作品です。

平成二十四年（2012）から、ご一座のご連衆を恃み、国民文化祭、俳口全国連句大会に応募してきましたが、入選できるのがやっとといったところでした。それでも本人は嬉しかったものです。それが今年の三月、俳口連句大会実行委員会から思いがけない吉報が届いたのでした。「身の内の」のご連衆に心から感謝です。

四宮会は、猫蓑会副会長でいらした故桃径庵式田和子宗匠がご自宅で開催しておられた由。後を継がれた式田恭子丈のお誘いを受け、平成二十五年九月に荻窪の桃径庵を訪ねました。桃径庵で初めて歌仙の捌をさせて戴いた「三伏や」が俳口大会で入選しましたのは、連衆としてお力添えくださった二世恭子宗匠が、平成二十七年に母君の許へ旅立たれた後のことでした。

昨年の春、「三伏や」以来の捌で満尾した「身の内の」でしたが、校合も済まぬ四月一日、脳出血を発症。軽度だったことと、処置が早かったことが幸いし、数日で退院。今までのところ後遺症もなく、一年余りが過ぎました。

もしかしたら、遺作になっていた作品でした。甦った命を信じて、もうしばらく連句の世界に遊びたいと願っているこの頃です。

連句を始めてから、折に触れ「三つ物」を作るようになりました。今回は愛媛県に敬意を表して「えひめ」を折句にいたしました。ご笑覧いただければと厚かましいお願いです。

松山市長賞に寄せて

縁結ぶ便りなりけり梅香る　霞
　光の春を乗せて西風　仝
冥土への土産調ひうらかに　仝

愛媛新聞社長賞

歌仙「秋暑し」

杉本 聰　捌

秋暑し講演骨子定まらず　聰
やよ励めよと天窓に月　由紀子
勝相撲郷土の期待一身に　聰
オープンカーに満面の笑み　由
指揮棒を振れば高鳴るファンファーレ　聰
ふくら雀の並ぶ枝先　由
ウ 霜柱さくさくと踏む赤い靴　聰
刺青の腕に服を掴まれ　由
お嬢さん落ちましたよとイヤリング　聰
ウインクをする塀のドラ猫　由
ご隠居は欠伸怠へて誦経する　聰
難読漢字孫に教はり　由
泡盛に酔ひて月影七重八重　聰
食べ頃となる庭の枇杷の実　由
校倉に螺鈿ひそかな輝を放ち　聰
時空を超えて彷徨へる魂　由
肩組んで旧師を囲む花の下　聰
声を揃へてメーデーの歌　由
ナオ 消えやすき夢こそよけれ石鹸玉　由
恐竜図鑑表紙ぼろぼろ　聰
災害のあといち早くボランティア　由
国守る明日の柱頼もし　聰
高層の鏡の壁に映る空　由
ふと巻き直す藍のマフラー　聰
侘助を活けて待ちたる不義のひと　由
神を畏れず悦楽のとき　聰

新しき令和の御代に走り抜け　由
東京五輪準備着々　聰
望月の金色展べる甃　由
拝み太郎と交はす挨拶　聰
ナウ はららごをあてに屋台の枡で呑み　由
出世頭の友は大臣　聰
お散歩の園児の歩みよどみがち　由
小鮒すいすい水ぬるむ池　聰
花の木に上れば花の精となり　由
遠く聞こゆる桑摘みの唄　執筆

連衆　馬場由紀子
令和元年九月三日　起首　同十一日　満尾
文音

あいテレビ賞

歌仙「節分や」

荒木 鑑　捌

節分や代る御世にも福来れ　鑑
冬の別れを告ぐる予報士　忠史
ハーモニー大河の流れ歌ふらん　孝子
息健やかに教室の友　遊眠
見上ぐれば行方遥かに望の月　肇
雀蛤となるを信ずる　孝
ウ 新蕎麦の汁はこれだよ母の味　史
何処へ逃げても釈迦の掌　肇
公達に姫の条件難しく　史
三高よりは家柄が先　眠
玉杯に微かな疵の走りをり　孝

金庫の奥に謎は封印　肇
月を待ち夜釣の舟は舫解く　史
短気は損気言つたぢやないの　孝
やけ酒はやめて身体に障るから　眠
残業時間どれが本当　史
CEO落花の渦に追われたり　孝
棚田の籾を浸す谷水　仝
ナオ ジグザグに峠越え行く遍路笠　史
疲れによしと呉れるキャラメル　孝
騙されて買った小皿が百万円　眠
玄人相手粋な駆け引き　肇
この辺り河童が出ると噂して　史
アヴァンチュールは避暑の醍醐味　肇
戯れにカード遊びに肌を賭け　孝
甲冑笑ふ城の踊り場　眠
堅牢な論理を築く哲学者　肇
秒読み始め下町ロケット　史
月の能一調の笛高らかに　眠
今やご法度霞網猟　史
ナウ 籠を編む老いの手仕事うそ寒く　孝
郵便配達声掛けてゆき　眠
満員は予想通りにゴッホ展　肇
からすが群るる病院の庭　孝
飛鳥山なんと幸運花盛　鑑
帽子を濡らす春のお湿り　執筆

連衆　根津忠史　坂本孝子　内田遊眠
宇田川肇
平成三十一年二月三日　首尾
於　江東区芭蕉記念館

第二十四回（令和二年）
えひめ俳口全国連句大会入賞歌仙 六・七

愛媛県連句連盟会長賞

歌仙「猫語鳥語」　石川 葵　捌

猫語鳥語閑もる街や梅雨に入る　葵
紫陽花重く青の様々　一枝
パズル解く少年の眼のひたすらに　節子
マウンテンバイク塀に立て掛け　ふさ子
博覧会準備整ふ明けの月　節
処暑の湊に金管の音　枝
ウ 水蜜桃その香は甘く滴りて　仝
切り髪の女の笑みの清らか　葵
恥ぢらひつつ九十歳の歳の差婚　節
蓋をかたかた薬缶沸騰　ふ
塩飴を舐めて操る掘削機　枝
梲（うだつ）の町に杜氏来たると　仝
銀蟾の照らす階留守詣　ふ
感謝の気持ちは出世払ひで　葵
孫達のスーダラ節を叱る祖母　枝
くつくくつくと鳩が首振る　節
花の苑平和記念のモニュメント　枝
痕も残さず癒ゆる雁瘡　節
ナオ きときとのめばる塩焼きいかがです　葵
道の駅まで残り三キロ　枝
終章へ指揮者大きくタクト振り　ふ
書生部屋には反故の原稿　枝
夢語る朴念仁に惚れぬいて　節
あんたとあたし同じお墓に　ふ
肝試し細き灯りがやつと見え　枝
長い舌だし主待つ犬　ふ
SNS働き者をアピールし　節
バックパッカー着回しの服　ふ
月耿と山頂の城浮きあがり　枝
糸瓜の水取る歌詠みの家　仝
ナウ 遅れ蚊に頬を刺されし小役人　ふ
一休さんは向う鉢巻　葵
廃校にIT企業誘致して　ふ
セピアの時計ねぢを巻き上げ　枝
ほろ酔ひの我が身ほろほろ花となり　葵
壺中の天に揺れるふらここ　節

連衆　西田一枝　長坂節子　佐藤ふさ子
令和元年七月三十日　首尾
於　みよし市カリヨンハウス

俳口実行委員会会長賞

歌仙「覚え忘るる」　鈴木了斎　捌

一つ覚え一つ忘るる小六月　敏枝
大綿虫のふらふらと浮く　了斎
チェーンソー杉の谷間にこだまして　徹心
茶会の準備とどこほりなく　陽子
玉兎まだ寝をると思ふ昼下り　斎
蔦の葉の這ふ丘の洋館　枝
ウ ハロウィンの魔女の帽子のうすよごれ　陽
奥の暗がり誰かたたずむ　心
雲去りて天狼星の燦然と　枝
さざなみ寄する火口湖の岸　斎
白味噌の甘味の似合ふ女なり　心
同じ刺青胸元に彫る　陽
目くるめくその夜が明けて残る月　斎
干涸びてゐる鵙の早贄　枝
盆休みなれどふるさと閑散と　陽
ディズニー土産抱いてすやすや　心
降りそそぐ花に包まれ太郎冠者　枝
東風の匂にむせかへりつつ　斎
ナオ 河豚供養酒は馴染みの京伏見　心
テレビニュースの取材班来て　陽
前面に子供を立てる嘘臭さ　斎
脇には背の高き坊様　枝
パスポートとりてインドにあくがるる　陽
偏西風が蛇行して雨　心
高速道分水峠越えて延び　枝
黒革つなぎ脱げば素裸　斎
くちびるは蜥蜴のやうにぬめぬめと　心
蚊帳ごしの月海の底めく　陽
寝入りばな決まつて同じ夢を見た　斎
東北弁でかきくどく母　枝
ナウ 塩汁鍋もつと食べろと言はれても　陽
枯野の路を轍何本　心
長生きも草臥れるねと百五歳　枝
私の骨は太く真白く　斎
接待のほうじ茶嬉し花の雨　心
雛並びて清らなる部屋　陽

連衆　箭内敏枝　佐藤徹心　加藤陽子
令和元年十一月二十一日　起首
同二年一月二十四日　満尾　於　羽生の杜

温故知新

20：月と恋はなぜ必須なのか

●シンボリズムで読み解く神話的世界観

大島直行著『月と蛇と縄文人』
角川ソフィア文庫　令和二年（2020）刊

著者、大島直行（なおゆき）氏は、北海道考古学会会長、日本考古学協会理事、日本人類学会評議員などを経て、現在は札幌医科大学客員教授、医学博士でもある。守備範囲の広さからして異色の存在だ。本書は、様々な縄文時代遺物・遺跡が当時の人々にとって持っていた「意味」を正面から徹底的に問う。従来の考古学がほとんど放棄していた試みに、著者の学際的な広い視野と知識が生きる。その「意味」は、合理性、合目的性、有用性などではなく、何より彼らにとっての精神的な意味、世界観にかかわるものだ。

たとえば、縄文石斧の素材の石は硬軟様々で、機能中心に考えれば当然予想される硬い石種を選んではいない。石斧に使われる石に共通する属性は、木を伐る機能と関係ない「緑」という色だけだ。緑は枯死の冬から再生の春への回帰を象徴する木々の芽吹きの色だ。石斧は木を伐る道具である以上に、伐り倒す木の再生を「緑」によって祈る呪具、死者の墓（丸い穴）に再生を願って副葬する呪物なのだ。

縄文人の世界観の中心には万物の「死と再生」があり、その最高のシンボルは天空にあって死と再生を繰り返す「月」だ。月の周期が女性の月経周期と一致することも、人の誕生と月のかかわりを示す。月とその光が全ての「水」と命を統括するという観念は、日本だけでなく古代世界に広く共通する。

「水」「緑」の他に、冬眠・復活・脱皮を繰り返す「蛇」、水中で変態する「蛙」「蟾」、子宮と連想がつながる「容器」「丸い穴」などが、「月」を中心とする「死と再生」の象徴体系の中に位置づけられる。これらによって土器、土偶、住居、その他様々な遺物、遺跡の「意味」に光を当てるのが本書の意図だ。

かつては、人も文化も縄文と弥生の間に断絶があり、日本の文化は弥生文化に由来すると考えられた。しかし最近は人のＤＮＡも文化も、縄文から現代までの推移は連続的だと見る考えが力を得つつある。その文化が日本列島に孤立した特殊なものではなく、他所の古い文化と多くが共通することもわかってきた。古代中国でも月には蛙や蟾が住む。

生産様式や社会構造が人の意識を規定するとは、右から左までの近代思想の多くが公然隠然に信奉するイデオロギーだ。だとすれば、縄文は狩猟採取、弥生は水田農耕と、生産様式の異なる二つの時代の間には文化の断絶があるはずだが、はたしてそうか。日本の農耕は里山の自然と不可分だし、山の神が春になると里に下りて田の神になる。列島全体が海に囲まれ、そこは今も狩猟（漁労）採取の世界だ。結納で取り交わされる品は海山の天然の幸ばかり、申し訳程度に稲穂が添えられる。どう見ても居住性の悪い竪穴住居に、庶民は鎌倉時代初期まで住み続けた。丸い竪穴は著者に言わせれば墓穴と同じ子宮のシンボル、家も再生のための祈りの場だ。それと意識されずとも、今も精神生活の根底には縄文時代と同じ心性が生き続けていないか。そこにはむしろ未来への豊かな可能性が眠っているのではないか。

それが連歌俳諧とどう関係するのか。『猫蓑通信』第九十六号の「温故知新」にも登場した民俗学者・歌人の谷川健一は『うたと日本人』（講談社現代新書）で、紀記歌謡の片歌（五七七）二首による掛け合いの一部省略により、五七・五七七の「五七調」短歌が生まれる過程を跡づけた。それが「七五調」に移行した後、上の句五七五と下の句七七の掛け合いによる短連歌、そして鎖連歌が生まれた。だから谷川によれば、日本語の古典詩歌はすべて対話性を内包しており、連歌は短歌の発展形というより、有史前の掛け合い歌への「先祖返り」なのだ。連歌そのものは千年前の宮廷貴族社会のものだが、その淵源は文字資料では遡りえない遙かな過去にある。

連歌一巻に月の句、花の句、恋の句は必須だ。一巻の飾りとされる「花」は端的には桜で、桜は稲作と係わりが深い。平安朝では花の代表は桜だが、平城朝では梅だった。梅はその時代に中国から輸入されたもの。さらに昔、「花」は何だったのだろう。

そこで気付くのは、連歌俳諧には花の句より月の句のほうが多いことだ。歌仙は二花三月と、月が一句多いだけだが、百韻なら四花七月と、月は花の倍近くある。現在脇役に位置づけられながら数の多いものが、後景に退いたかつての主役、というのはよくある構図だ。本来は「月」が世界観の主役、花は再生の季節の到来を告げる脇役の一つだったのではないか。恋の句が必須な理由は言うまでもない。

四十年近く前、秋田県鹿角の「大湯環状列石」に立ち寄る機会があった。直径五十メートル前後の日本最大の複雑なストーンサークルが二つ、道を挟んで隣りあう。この環状列石も緑色の石で作られている。何のために作られたのか、未だに定説はない。一見してまったく意味不明だが、だからこそ、かつてそこに濃密な精神生活があったに違いないという、そのことだけが強烈な迫力で伝わってきた。

古池や蛙飛び込む水の音　　芭蕉

この句を古代の月夜の景と読むのも一興だ。（斎）

平成三十一年
亀戸天神社藤祭俳諧興行　1～6

文章生の座
二十韻「藤重く」　石川葵　捌

藤重くその香零るる水面かな　葵
　橋も庇も朱き清明　了斎
霾晦日々の洗車に励むらん　聰
　うまく剥けないキャラメルの紙　ひろみ
ウ　コンビニはリサイクルにも力入れ　鑑
　新聞配達夏の霜踏み　聰
緑陰の洋館に住むお嬢様　斎
　デリンジャー銃隠すガーター　仝
爺ちやんに僕の婆ちやん首つたけ　み
　技に秀でるまほろばの国　鑑
ナオ　羚羊の軽やかに崖駆け登り　み
　雪見上ぐればこの身浮揚す　聰
ショーケンのライブ最前列を占め　斎
　推理小説謎の毒茸　み
心中のふりの駈落ち嗤ふ月　斎
　君の本音が透けるうそ寒　鑑
ナウ　なにもかも洗ひ流して新酒酌む　聰
　一・二・三・四ラヂヲ体操　み
上皇を待ちをり花の吉野山　鑑
　令和令和と朝の囀　執筆

連衆　鈴木了斎　杉本聰　江津ひろみ
荒木鑑

玄蕃助の座
二十韻「絶え間なく」　岩崎あき子　捌

絶え間なく藤房ゆるる神の庭　あき子
　春の名残に渡る朱の橋　通斉
籠いつぱい栄螺つめこみお土産に　あや
　猫がちやつかり舌舐りし　未悠
ウ　裏メニュー多い店です冴ゆる月　転石
　柊挿せば客がふらりと　仝
待つていた愛の言葉は亜拉毘亜語　や
　隊列の中捜す人あり　悠
家出してどこまでも行く路線バス　仝
　親不孝する十六の頃　石
ナオ　老いてなほ渾名でつどふ暑気払　斉
　勝負下着は絹のすててこ　や
後妻業般若刺青燃え盛り　斉
　近く寄れぬとぼやくあぶれ蚊　石
月旅行ついに独りで行く羽目に　や
　ハロウィンの群捌く警官　斉
ナウ　シャッター街復興企画する若手　悠
　昭和の歌は少し淋しい　や
ひたすらに飛花は大河を目指しつつ　斉
　ひらりひらりと黄蝶舞ひ上ぐ　悠

連衆　菅原通斉　棚町未悠　中林あや
林転石

少内記の座
二十韻「碑守」　宇田川肇　捌

そぼ濡るる碑守や亀の鳴く　肇
　水面を染める藤色の波　洋子
クレソンに自家製ソース振りかけて　節子
　銘柄予想上々と聞く　泉子
ウ　月の出て怪談芝居始まりぬ　美友紀
　蚊を打つとみせ想ひ人打ち　節
待ちをればいつか現る王子様　泉
　バラで十枚宝くじ買ふ　洋
新幹線ターミナル駅どこも似て　紀
　虎落笛吹きすさぶ鉄柵　節
ナオ　まあ飲めと熱燗注いでくれる奴　紀
　備前の碗に走る火襷　肇
新入りは青き瞳の美少年　洋
　ママンの次に恋人が好き　紀
お暇をいただきますと月に告げ　泉
　胡瓜でこさへた馬が出迎へ　洋
ナウ　平安の戯画を彩る草紅葉　仝
　弦と管とのコラボゆるやか　泉
讃へあれ掲げる剣に飛花落花　肇
　風光る中届く新聞　節

連衆　大島洋子　長坂節子　青木泉子
奥野美友紀

讃岐守の座

二十韻「藤の雨」　佐藤徹心　捌

藤の雨傘も二重にかさなりて　徹心
若草の香のつつむ撫牛　路子
島めぐり新車の旅のうららかに　孝子
声高らかに山びこを呼ぶ　有子
ウ 人住まぬ家我がものと蜘蛛の糸　雅昭
月夜に仕込め赤蝮酒　ココ
間違へて飲んでしまつた惚れ薬　路
オセロが返り嫌が大好き　有
十才でプロ宣言の描く夢　孝
五番と言へば運命でせう　仝
ナオ 里神楽穢れを払ふ笛太鼓　路
ボール抱へてラガー突進　コ
ほろ酔でどうでもしてと手をひろげ　昭
わたし好みよ船長の髭　孝
大騒ぎトムとジェリーの月の夜　コ
穴の奥には貯へた栗　有
ナウ 秋惜しむ戦は遠き日となりぬ　路
達筆過ぎて読めぬメモ帳　有
少女等はガウチョパンツの花衣　孝
紋白蝶の遊ぶ菜畑　昭

連衆　倉本路子　坂本孝子　佐々木有子
岡田雅昭　平野ココ

蔵人頭の座

二十韻「玉砂利」　名古屋富子　捌

玉砂利を踏むさざめきや藤祭　富子
囀を背に受くる御祓　遊眠
めかり時欠伸屈伸きりもなし　忠史
通学の子らとりどりの靴　雅子
ウ 山の端に涼しき月のほつかりと　郁子
到来物のメロンたつぷり　豊美
甘い汁甘い言葉は大好きよ　雅
妃のために造る華清池　史
はるばると遠き旅路に誘はれて　郁
メジャーリーガー夢のまた夢　史
ナオ 切炬燵酒場は人気上々で　眠
皆がつつつく鮟鱇の鍋　雅
ボブディランジャパンツアーの声の錆　豊
昭和も遠くなりにけるかも　郁
月よりの使者は君かと仰ぐ月　眠
ハロウィーンにはきつと逢へるさ　史
ナウ 松茸のありかはそつとパソコンに　雅
同窓会を二泊三日で　眠
滝のごと花枝垂れたる尾根の道　豊
異国の人の春のスカーフ　郁

連衆　内田遊眠　根津忠史　武井雅子
東郁子　髙橋豊美

左大弁の座

二十韻「肩車」　三木俊子　捌

肩車乗る子の揺らす藤の房　俊子
傘もささずに濡れる春雨　千惠子
のどらかに新元号を書くならん　知子
突如聞こゆる隣家掃除機　鄭和
ウ 月冴えて水辺ゆく舟去る辺り　純子
イオマンテの夜ニシパ大好き　和
美少女の足踏み踊る酒の宴　千
上司除け者 LINE 連絡　純
練りあげた五泊六日の旅企画　知
どこへ行くにもスヌーピー抱き　千
ナオ 駐屯の米兵闊歩半ズボン　仝
珊瑚の海に土砂投ぐる夏　知
次々と愛の言葉を受けとめて　純
霧の降る音身を寄せて聴く　和
軽井沢サナトリウムに蒼い月　千
紅葉見るより巴里で買物　純
ナウ あばずれと呼ばれ跨るあばれ馬　和
かりんと囓る奴の鼻唄　知
町医者の好きの高じて花守に　和
駅前広場しやぼん玉舞ふ　執筆

連衆　鈴木千惠子　松田知子　高山鄭和
近藤純子

平成三十一年四月二十四日　首尾
於　亀戸天神社

平成三十一年 亀戸天神社藤祭俳諧興行 7〜9

右大臣の座

二十韻「藤の波」 本屋良子 捌

太鼓橋苑一面に藤の波　良子
　境内満たす繁き囀　暁巳
のどらかに静物画描く居間にゐて　吉文
　インクをこぼすスカートの上　香里
ウ 高原の空に輝く夏の月　英利
　洗ひざらしの長き黒髪　墨
スケボーの鮮やかな技ほれぼれと　文
　好きな相手にわざと意地悪　墨
爪噛んでひとり読んでる私小説　巳
　尼になつても熱燗を呑み　文
ナオ むつくりと厠へ向ふかまど猫　利
　右往左往の掃除ロボット　墨
きりもなく学校プリント散らかして　里
　思ひを込めて渡す虫籠　文
三日月の実は見てゐる密な仲　里
　菊の枕の虚しさを抱き　巳
ナウ お袋の煮魚の味なつかしく　利
　ゼロイチニイゼロテレビ通販　墨
平成に令和と続く花万朶　文
　村人こぞり飛ばす大凧　利

連衆　島村暁巳　永田吉文　武田香里
篠原英利　竹中　墨

大宰帥の座

二十韻「菅公の」 由井健 捌

菅公の令の心に藤和む　健
　歌人集ひ清明の宴　美奈子
校庭の巣箱作りも楽しくて　敦子
　パステルカラー混ぜるパレット　文伸
ウ 月ばかり炬燵の部屋を照らしゐる　秀樹
　捨てた男は凍星の数　健
僕の命君にあげると言うたのに　奈
　ゴルフ外交賞品は国　敦
トンネルを抜ければそこは無人駅　伸
　谷を下つて沢蟹を追ふ　樹
ナオ 檀尻の梶棒捌き鰡背振り　健
　いてまえ打線勝つて祝杯　奈
ままごとの幼恋より共白髪　敦
　豪華客船密室のハグ　伸
シェイクスピア舞台の袖に月出づる　健
　粋な着こなしけふも新蕎麦　樹
ナウ 道すがら奏でる虫の音を聴きて　奈
　コンビニドアー右に左に　敦
花守の未来に託す夢幾つ　伸
　八十八夜今し還暦　樹

連衆　鈴木美奈子　武井敦子　若林文伸
青木秀樹

平成三十一年四月二十四日 首尾 於 亀戸天神社

正一位の座の座

二十韻「品のよき声」 吉田酔山 捌

藤棚や品のよき声来ては去る　酔山
　亀鳴く池によせる小波　一枝
炉塞の茶席の菓子はこしあんに　明子
　締め忘れたる裏路地の鍵　淳子
ウ 月涼し薬研で砕く奥義薬　佳之子
　手縫いの浴衣彼に贈らん　正夫
姉婿の味な目つきについ迷い　之
　バイリンガルは英語ドイツ語　淳
5Gの凄さ実感できぬ歳　明
　同窓会で徳利林立　正
ナオ やまだちは秩父音頭で寒施行　枝
　遠吠え長く消防車ゆく　明
お馴染みのご指名料は高くつき　淳
　抱いて果まで共に落ちよう　仝
提携は解除されたかパリの月　枝
　美術展にて大賞をとる　正
ナウ 卒寿から益々元気豊の秋　之
　ドッジボールは女子が圧勝　明
花筏河口目指して盛り上がり　淳
　黄蝶三つ四つゆるやかに舞い　枝

連衆　西田一枝　野口明子　上月淳子
染谷佳之子　國司正夫

お父ちゃんは何て言ってる？

……執筆役回想記

若林文伸

山荘の周辺は以前と変わらず頭上まで木々で覆われた万緑であった。とは言うものの、八月下旬ともなれば山間には秋の気配が漂い、信州の夏の終りを告げていた。

その日は、帰郷の途次にお寄りしたのではなかった。唯一稽古の為、十月に控えた正式俳諧所作諸々の特訓日なのであった。明雅先生の御写真に見守られて、宗匠席には郁子様、知司、座配等の役に雅子様、そして配硯、付句して頂く連衆役には二女の信子様がお一人で何役もこなされてお相手して下さった。傍らには、先年執筆をされた雅子様の挙措を寸分の隙なく映したビデオを置きながら……。それは安定かつ鮮明な映像で、撮影者は信子様とお聞きして、こういう処にも先生のＤＮＡは現れているのだと感心した。そんなさ中……、

「お父ちゃんは何て言ってる？」と、信子様の声がして、皆で先生御手書の「正式俳諧興行次第」と題された紙面と画像の件の箇所とを見

懐紙を水引で綴じたのち、端作りする

亀戸天神社奉納直会興行

令和元年五月二十四日　首尾

於　錦糸町ビッグエコー五階

二十韻「神鼓」　岩崎あき子　捌

万緑や神鼓のひびく心字池　あき子
初夏の日射しを浴びる撫牛　有子
二眼レフ絞りは少し大きめに　肇
泣きべそ直すミルクキャラメル　徹心
観覧車ゆるゆる月の昇り来て　雅子
密室の中君に野菊を　千恵子
好きだよとつい口走り今年酒　健
斬られたくなる小竜景光　肇
蔵ひとつ買ひ占めてゐる骨董屋　千
プライベートにパリへジェットで　心
プードルの散歩目深に冬帽子　雅
悴む月を覚ます呼び鈴　有
こんな夜は捨てた女が夢に立つ　肇
ホスト稼業は今源氏なる　千
一億を出しても欲しい友の妻　有
宝石箱にしまふ臍の緒　健
断捨離の捨てられる物山のやう　雅
春告鳥の声のせはしき　心
飛花落花京の辻ゆく人力車　健
オフィスの窓に臨む初虹　肇

連衆　佐々木有子　宇田川肇　佐藤徹心
武井雅子　鈴木千恵子　由井健

比べてみる事度々であった。この興行次第は各段の所作を進行順に仔細にわたり明文化していて、下欄外には挿絵が付けられている。特に執筆の所作は何人もこれなくして習得することは出来ないだろう。四人はまさに先生の御声に接しながら稽古を続けたのであった。ウッドデッキでの小休止は、遅くなってしまったお昼をいただいた。

——先生から「連句は六十歳からでもできるから……」と言われた事、私の二女も同名の信子である事など談笑していたが、先生の執筆はお若く五十二歳でしたものねえ——

興行を終え、配役一同とご神職、菅公像の前で記念撮影

寛ぎの一ト時は短く、すぐ稽古に戻る。段ボール箱を文台として起右座左、文台捌の反復、歌膝の姿勢と五時間余の緊張の連続で到頭、我が膝頭は音を上げた。迂闊にも山荘は堅い木床であったのを軽くみた結果であった。この日の特訓はさらに、十月の柏道場での仕上げ稽古へと続くことになった。かくして平成三十年秋の深川、翌年春の亀戸と多くの方々のお助けにより無事執筆役を終えることが出来たのである。遅れ馳せながら、ここに深謝申しあげ回想記の筆を擱くことに致します。

文台に誰が選まれて恋し鳥　　井月
風まかせにてそよぐ撫子　　拙次

亀戸天神社藤祭正式俳諧配役

宗　匠　　生生庵秀樹
脇宗匠　　本屋　良子
執　筆　　若林　文伸
知　司　　内田　遊眠
座　見　　根津　忠史
座　配　　佐藤　徹心
花　司　　林　　転石
配　硯　　奥野美友紀
老　長　　坂本　孝子
解　説　　鈴木千惠子
奏　楽　　武井　雅子

第三十三回
亀戸天神社藤祭奉納正式俳諧
俳諧之連歌　二十韻

藤の香や文台捧ぐ御宝前　　明雅
春惜しみつつ和する柏手　　酔山
山笑ふマイカーの列きりもなし　　雅子
遊び疲れて眠る子供ら　　葵
ウ　月青く屋根には雪の五六寸　　孝子
野沢菜漬をつまむ工房　　弘子
初めての男の匂ひめくるめく　　あや
世の人我をお嬢育ちと　　良子
洋ダンス整理ダンスは粗大ゴミ　　香織
猫も鴉も知らんぷりして　　遊眠
ナオ　赤い舌舐めてかかれぬかき氷　　千惠子
珊瑚の海を埋め立てる夏　　ひろみ
境界をおれのもんだと押し拡げ　　転石
新婚さんに分ける桃の実　　美友紀
湯上がりの令姿ほんのり月の宿　　忠史
夜寒の岸に揺らぐともしび　　徹心
ナウ　日本橋かつての風情懐かしむ　　待雪
老眼鏡を掛けつ外しつ　　畢
良き友と相変らずの花見酒　　秀樹
夕霞して歌ふふるさと　　執筆

平成三十一年四月二十四日　首尾
亀戸天神社神楽殿に於て興行

第二十八回（令和二年）岐阜県文芸祭 連句部門受賞作品

秀作賞

短歌行「クリムトの女」　鈴木千惠子　捌

クリムトの女傾ぎぬ夏の霧　鈴木千惠子
深呼吸して開く睡蓮　奥野美友紀

料理長仕上げの塩を大鍋に　千紀
四方山話尽きぬ人の輪　千紀

ウ
つちのこが出ると評判萩の道　千紀
月夜のかかし恋をするなり　紀
新涼のプリーツぴしり高校生　千紀
前髪少し切りすぎたかも　紀
おほらかな稽古始を世阿弥説き　千紀
いびきをかいて眠る老猫　紀
大漁旗待つ内海は花の頃　千紀
先譲り合ふお遍路の宿　紀

ナオ
ヨーグルトスカッチ舐める昭和の日　仝
CMソング耳を離れず　千紀
駅伝の最終走者逃げ切りて　紀
不実な男軽い約束　千紀
アンケート既婚の欄にチェック入れ　紀
好きな酒なら断固焼酎　千紀
月細し携帯電話つながらず　紀
乱れがちなる雁の列　千紀

ナウ
赤とんぼ人差し指をくるくると　紀
石碑の除幕議員揃ひて　千紀
花万朶文学館のカフェテラス　紀
自転車を漕ぐうららかな午後　執筆

令和元年八月七日　起首
同　九月二十二日　満尾
文音

連句上の……

奥野美友紀

昨夏、八ヶ岳の麓・長野県原村で、内田遊眠さんや鈴木千惠子さんを中心に、ゆかりの方々と一座する機会があった。八ヶ岳連句会の後、同じく原村にある友朋山荘（オーナーは、連衆であり、千惠子さんや私の先輩である闇小妹さん）での集まりに参加し、帰宅して巻き始めたのが、受賞した「クリムトの女」である。このとき、私たちは同時進行でもう一巻巻いた（短歌行「アルパカのまつ毛」）。千惠子さんが岐阜県文芸祭に応募するというので、それなら私も、とずうずうしくお願いしたのである。発句は、連句会のまえに早出して、八ヶ岳アルパカ牧場に行った体験をもとに詠んだ。

「クリムトの女」の発句は、絵画を題材としている。千惠子さんの、絵画を詠んだ発句を私はもう一句知っていて（「淡く濃く淑気ただよふ松林図」）、こちらにも脇を付けたことがある。半歌仙「松林図」は、この六月で七回忌となる二村文人さんとの三吟、私にとって初めての文音であり、『猫蓑作品集』十九号に収載された。クリムトの発句がふと恋句のように思われたのは、この画家の、女と絢爛たる色彩と退廃のイメージゆえか。恋句ではないが、発句のなかにある、うたかたのような何かをつぶして消してしまわないように、という気持で脇を付けた。

三月に予定されていた岐阜県文芸祭の表彰式は、コロナ禍により中止となった。

岐阜へは昨年十一月、千惠子さんと『獅子吼』創刊百号のお祝いに訪れている。私たちはそれぞれ祝章句をおさめ、笠着連句にも一句ずつ付けてきた。連句は、世吉の形式である。案内されたテーブルは、連句の短冊が掲げられた場所のすぐ近くだった。私はひんぱんに付句を確認し、一巻の進行を眺めていた。取材に入っていたテレビ局の人と話したりもした。そして聞かれるまま、連句というのは、などと話しながら（連想ゲームのように思われがちだが、式目という、スポーツでいうところのルールのようなものがあり、とか）、自分がなんだか高揚していることに気づく。

一般の人が連句作品に接する機会は、残念ながらそう多くはない。それはつまり、連句について聞かれているこの「今」が貴重であることも示していた。

連句を巻くことはおもしろい。連句について話すこともおもしろい……が、むずかしい。ただ、どちらも大切であるということを、私はずっと、いつも、私の連句上の姉や兄から教えられている。

水壺連のことなど

御園魚彦

「連句ちうものがあるんだが、一度やってみたいものだ。」神田明神下の居酒屋で一献を交わしているとき、今宮水壺兄が言いだされた。（今宮水壺氏は小生より十五も年上であるが、長年親しく兄事した付き合いに免じて、この稿では「兄」とよばせていただく。）

この一言が、我々が連句にのめり込むきっかけとなった。連句について何の知るところもなかった小生であったが、兄の話に大いに興をそそられた。連句を巻くには連衆が必要だが、当時渓流釣りや山遊びを共にしていた仲間の面々のことが思い浮かんだ。いずれも物好きな連中である。そして五月の連休に予定していた奥会津のキャンプ遊びに兄をお誘いした。うまくするとみんな乗ってくるかもしれませんよ、と。

こうして夕暮れから焚火を囲んで飲みながら始め、翌日に捲き上げた歌仙「曲り家に」の巻が、発端となった。昭和五十七年のことである。

曲り家に五月諸木の花ざかり　水壺
　瀬音やまめの歌ふなるべし　魚彦
うすうすと風にも霧のにほひして　雨工
人なき町の落葉踏みつつ　工
月影に踊りて消えし酒二夜　冬蝶
きのふ浅草けふは新宿　兎契

奥会津では五月に梅、桃、桜などが一斉に花開く。「諸木の花ざかり」だから、まあよしとしよう、と兄は仰った。今から見れば式目に外れたところも多い一巻ではあるが、ウラからナオにかけて弾みに弾んで、連衆を引き込んだ記念すべき一巻であった。

引き続き六月に、同じテント場で「飲食（おんじき）の男手ばかりあやめ草　水壺」で始まる歌仙を捲いて裏を返した。以降、昭和六十二年正月までの五年間で十三の歌仙を捲いた。これが我々の連句の第一期とも申すべきもので、連衆の一人兎契が「山戎（やまがの）歌仙」と題して記録に残した。

＊

もともと主な連衆は、みな飲み仲間である。一巻を捲き終えると、反省会とか直会とか称して、日をおかずに飲み屋に集まることが常であった。連句の場でも最初から酒が入ることが多く、生意気盛りの年ごろだから、付け筋をめぐって侃々諤々、一歩も前に進まず単なる酒盛りになって頓挫した歌仙も多い。そのうちに、メンバーそれぞれの生業の状況の変化もあって、昭和六十二年から平成四年まで長い空白が生じた。

その間水壺兄は、自宅近くの居酒屋の常連を連衆に連句を楽しんでいたが、その熱心な連衆の一人であった海砂さんに誘われて、猫蓑会に顔を出すようになった。猫蓑会では、その洒脱な人柄と付け合いの上手から多くの人に愛されて、連句三昧の日々を送られていたようである。

水壺師ローマ字賛自画像　昭和五十三年十二月二十五日
賛　相貌や金柑食みし小悪魔
句は昭和五十年秋の作か。小生が新事務所に移ったときに、祝いとしていただいた。今も事務所の壁を飾っている。

小生が水壺兄と知り合ったのは、小生が二十代のころに遡る。アララギの歌人であった兄の亡父の歌集版行を手伝ったのが最初の縁であったように記憶している。その頃兄は小生の営業先であった会社で、非常勤の勤めをしていた。本職は画家であるが、家族を養うには画業に固執するわけにはいかなかったようである。兄が制作した図版の受け渡しに訪れたとき「終わったら一杯やりましょう」がしばしばとなるのに時間はかからなかった。そして後に連衆となる小生の友人たちとも知り合い、楽しい酒席を共にすることになる。

兄は、知り合った酒友や店主に、挨拶句を即吟し箸袋にしたためて送るのが上手で、「箸袋

の宗匠」とあだ名されていた。兄の俳句は、召集から帰還して画学生になる前から長年にわたって書き留めてきたものである。二人で飲む折に、話題の赴くままに、記憶から取り出して、つと箸袋にしたためて示す俳句に、小生すっかり魅了されることが重なり、ぜひまとめて本にしましょうと小生から提案した。こうしてできたのが昭和五十九年刊の句集「長嘯」である。

「これは僕の日記なんだ」と、どこにも発表せずに書きためた千句余り、なかで小生の愛誦する秀句のいくつかを記してみる。

復員の手足触れをり青蚊帳に
（昭和二十年）

かへるでの若葉さやぎに生(あ)れて泣きぬ
（同三十六年）

子よ父は暇(いとま)だらけの木の実独楽
（同四十年）

叩頭の身すぎ糸瓜に暑気下し
（同五十一年）

酔快楽(すいけらく)一歩半歩を虫の闇
（同五十一年）

ある年の暮、飲み仲間の忘年会で披露された挨拶句も忘れられない。

修羅ふせて酌むも男の師走かな

＊

水壺連の連句が再開したのは平成四年、雨工（のち卯工）が仕事で知り合った人たちを誘って、曾遊の奥会津で興行したのがきっかけとなった。新しい連衆として聊才（のち了斎）、天山、塩哉(あんや)などの名が見える。そして平成十一年から十五年にかけて二十八歌仙が記録に残されている。この間、吃杏・秋余・美々丸・由泉ら若手や女性が加わり、吃杏が興行の幹事を務めてくれるようになった。

雨工は仕事以外でも親睦を深めようと、了斎を渓流釣りに誘ったが、「釣りなんか始めたら本気で漁師になってしまいそうだから」と断られたそうである。かわりにさそわれて連句を始めた了斎は、何事も基本を勉強するのが大切だからと、水壺兄に猫蓑会への紹介を依頼した。その後の研鑽、ご活躍は皆さまご存知の通りである。半生を漁師で送らなくてよかった！

平成十二年から十三年にかけて、水壺兄は座骨神経痛とかで外出がままならなくなり、記録に名がない。十三年四月久方ぶりに兄の発句で始まる歌仙が行われた。

久闊や雀隠れに杖ついて　　水壺
東風のなでゆくままの白髯　　了斎

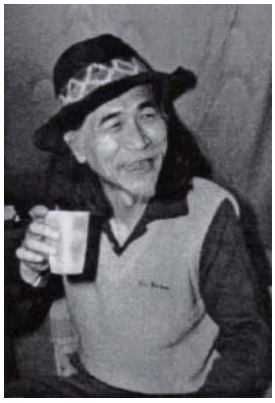
その後ぽつぽつと水壺連の興行に参加いただいたが、平成十五年二月、突然の訃報が届いた。我々は三月八日、清澄庭園・涼亭にて追善興行を行った。

止んぬる哉、水壺宗匠逝く。
冥府の旅は如何ならん、「雀隠れに杖ついて」など想い出られ涙す。連衆惜別の杯を重ねし折に、句集『長嘯』を読返せし冬子、一句を示して言へらく、四十有余年前の作なれど此度の病中の翁の思いやかくもあらんと覚ゆ。此句を冠し脇起し一巻を捲いて故人の偲とやせむとて

あかときの仰げば夢の花辛夷　水壺仏
ぶらぶら節の東風に乗りたる　冬丁
遠足の子ら賑やかに列なして　由泉

この年十月を一つの区切りとして、記録に残った連句を編み、和綴の水壺連歌仙集『雀隠れ』として限定二十部を連衆に配布した。

水壺連は、その後も二か月に一回の興行を目標に活動してきたが、九年前の九月、連衆の中心をなしていた卯工、冬丁の両君が、相次いでがんに命を取られた。残念無念である。また、幹事を務める若手諸君も仕事に追われる日常で、現在は休眠状態が続いている。またの新たな再開を期したい。


奥会津のキャンプにて

事務局だより

●第三十回猫蓑同人会総会が開催されました

・六月二十七日（土曜日）、新宿ワシントンホテル新館にて開催。当日作品は次号以降に掲載予定。

●今号に掲載の猫蓑会既往定例行事作品

・平成三十年四月亀戸天神社藤祭にて開催の第百四十五回猫蓑会例会二十韻八巻、および藤祭奉納正式俳諧興行二十韻、奉納直会二十韻。

・平成三十一年四月亀戸天神社藤祭にて開催の第百四十九回猫蓑会例会二十韻九巻、および藤祭奉納正式俳諧興行二十韻、奉納直会二十韻。

●既往定例行事の未掲載作品

・令和元年七月開催の第百五十回猫蓑会例会（猫蓑会総会）歌仙七巻。

・令和元年六月開催の第二十九回猫蓑同人会総会歌仙五巻。

・平成三十一年一月開催の第百四十八回猫蓑会例会（初懐紙）歌仙七巻。

・平成三十年七月開催の第百四十六回猫蓑会例会（猫蓑会総会）歌仙七巻。

・平成三十年六月開催の第二十八回猫蓑同人会総会歌仙七巻。

・平成三十年一月開催の第百四十四回猫蓑会例会（初懐紙）歌仙九巻。

・以上の各作品は次号以降に順次掲載予定。

●今後の行事予定

・令和二年七月三十日（木曜日）第百五十三回猫蓑会例会（猫蓑会総会）江東区芭蕉記念館にて開催。

・令和二年十月二十一日（水曜日）第百五十四回猫蓑会例会（芭蕉忌・明雅忌）江東区芭蕉記念館にて開催。

●受賞作品

・令和二年第二十四回えひめ俳口全国連句大会

愛媛県知事賞

歌仙「旧庁舎」　江津ひろみ　捌

松山市長賞

歌仙「身の内の」　高塚　霞　捌

愛媛新聞社長賞

歌仙「秋暑し」　杉本　聰　捌

あいテレビ賞

歌仙「節分や」　荒木　鑑　捌

愛媛県連句連盟会長賞

歌仙「猫語鳥語」　石川　葵　捌

俳口実行委員会会長賞

歌仙「覚え忘るる」　鈴木了斎　捌

・令和二年第二十八回岐阜県文芸祭連句部門

秀作賞

短歌行「クリムトの女」　鈴木千恵子　捌

●百寿おめでとうございます！

猫蓑会顧問、東郁子様が、今年、数え歳の百寿を迎えられました。郁子顧問は、猫蓑会設立主宰、故東明雅先生の奥様です。満百歳も間近、お元気でお過ごしとのことです。これからも会員の活動を見守っていただけるよう、よろしくお願いいたします。

万緑の中百歳の母とをり　雅子

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

・倉本路子様　令和二年四月　八千円

・匿名　令和二年四月　五千円

基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店

猫蓑基金　普通預金　３３７６０４５

●各種募吟にふるってご応募ください

・第三十五回国民文化祭みやざき2020　連句大会

募集形式　歌仙　応募締切　八月十五日

●会員の出版

『杞憂に終わる連句入門』　鈴木千恵子　著

定価 1,500 円（税別）
令和２年６月11日
文学通信刊
表紙は鈴木春信筆の浮世絵
「清水の舞台より飛ぶ美人」。

●前号訂正

二十ページ下段「会員のご逝去」、年号を「令和」とすべきところ、「平成」となっていました。

季刊　『猫蓑通信』第百十二号
令和二年七月十日発行
発行人　猫蓑会　青木秀樹
〒１８２・０００３
東京都調布市若葉町２・２１・１６
編集人　鈴木了斎
編集委員　奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・高塚霞・武井雅子・平林香織・御園魚彦（五十音順）
印刷所　印刷クリエート株式会社